土木遠景 第四回 矢木沢ダム

［文・写真］大村 拓也

利根川をひたすら遡(さかのぼ)っていくと、谷間に壁のように聳(そび)え立つ巨大なアーチダムが見えてくる。その先は、車では立ち入ることができない秘境「奥利根」。手つかずの大自然を前に、ダムが人間の行く手を阻んでいるかのようだ。

越後山脈の雪解け水を湛(たた)える矢木沢ダムは、洪水や渇水の際に河川流量を調整する治水と、灌漑(かんがい)や上水道、発電などの利水の役割を併せ持つ関東地方最大級の多目的ダムだ。一つの土木構造物がこれほど複数の役割を担う例が、ダムのほかにあるだろうか。

しばしば土木技術が自然環境を征服したかのように悪意をもって語られることがある。しかし、水は多すぎても少なすぎても、人間の生活はままならない。水をコントロールできて、私たちはようやく自然の恵みを享受できる。厳しい自然環境と、安定した人間の生活との距離を縮める橋渡しをすることがダムの使命だ。

ダムから流れ行く水はやがて、喉を潤し、田畑に作物を実らせ、まちを動かす。それでも、はるか彼方で生活する私たちは、ここにダムがあることに気付くことはない。世の中が平穏無事な証しだろう。

おおむら・たくや

1982年生まれ。写真家。
大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦労して修めた構造力学の知識を生かして雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

［撮影地］群馬県みなかみ町 矢木沢ダム

© OMURA Takuya